
はじまりの日、雨

towa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりの日、雨

【Nコード】

N8153T

【作者名】

towa

【あらすじ】

母親のいない秋良高馬は、引越し先の新しい町で、一人の少女に出会う。後に夫婦となる幼なじみの、それがすべてのはじまりだった。雨の日に起こった、小さな出会いの奇跡。「呼ぶ声が聴こえる」というシリーズ作品として、この二人の成長を見守っていく予定です。

1 ファーストインパクト（前書き）

この作品は、某巨大掲示板に投稿したものを加筆・修正したものであることを、ここにお断りしておきます。

towaの作品の「兄妹以上、きょうだい未満」という作品と同名の登場人物が出てきますが、一部設定が同じである以外に、まったく関連はありません。ご了承ください。

1 ファーストインパクト

第一印象は、あまりよくないものだった。

どこにでもいる普通のやつ、とか、あほっぽい顔、とか、鼻持ちならない、とか、その辺のいずれかだ。

なにしろ、越した先のアパートが以前にも増してボロボロで不機嫌になった所に、隣に建つ立派過ぎるほど立派な家の子供が笑って話しかけてきたのだ。

大人でも少し小さくれ立った気分になるだろうなら、子供にしてみればなおさらだった。

黄色と緑のチェック柄のシャツに灰色のジーンズといった、ボーイツシユな格好をした短髪の女の子は、玄関先に立ってあからさまに不機嫌な顔をしている少年にっこりと笑いかけた。

「わたし、七倉みどり。お母さんが、隣に越してきた子が同い年だから挨拶に行けて。」

だから、これからよろしくね。そっちはなんていうの?」

本音を言うともったくよろしくしたい気分ではなかったのだが、経験からキンジョツキアイは初めが肝心だと分かっていたので、しぶしぶ答えることにした。

「俺は秋良高馬。それほど仲良くする気もないけど、お隣さんやったらしゃーないし、

ま、テキトーによろしゅうしたってや」

ことさらテキトーを強調して言い放つと、相手は微妙に含ませた棘に気づいたのか、少しむっとした。

「うん…でもテキストにするぐらいだったら、初めからよろしくなんてしない方がいいと思うよ」

そう言つて、彼女は背を向けるとスタスタと行つてしまった。

秋良は少し呆気にとられながらも、予想以上に生意気そうな少女の態度に鼻白んだ。

そして、行つてしまった背中を見送ることなくさっさと部屋に引き返した。

ものの一分もかからない、これが幼い秋良とみどりの出会いだった。

それから数日しても、秋良とみどりは、話したり一緒にいたりする機会を持つことはなかった。お互いに最初の出会いは印象が悪く、特に相手に興味を持つようなこともなかった。当然の結果かもしれない。

ただ、通う小学校も学年もクラスも同じなので、朝方の登校する時間や、下校する時間帯が重なつてしまい、顔を合わせないまでには至らなかった。

そして、偶然鉢合わせなどしたときには互いに気まずげな顔をして、少し距離を置いて目的の地までを歩くのだ。

そんな時、秋良は決まつて居心地の悪い思いを抱いた。彼にとつてそれはとても以外で忌々しいことだった。

秋良から見る同年代の者たちは、皆同様に低俗で、取るに足らない存在だった。

幼い頃に父が母を捨ててから、ろくに定職に就かず酒を食らっている父と二人で暮らしてきた秋良は、その年で大人びた思考回路を強要された。

それゆえ、些細な事で囃し立てたり馬鹿にしたりする同級の子供は何も分かっていない馬鹿で、更に徒党を組んでいじめなどを行う輩は虫以下と思っていた。

だから、そんな奴らにどう思われようが気にしない。

自分は暇な奴らと違って忙しいのだ。

そう思った思いで他人と接していた秋良にとって、隣の家に住む七倉みどりという存在は、どうにも位置づけに困った。

彼女は、クラスの大半の者たちが持つ、異質な者を排除しよう、或いは無視しようという瞳で秋良に接しなかった。

だがたまに目を合わせると、その視線には明らかに嫌悪の色が浮かんで、表情も仲の良い友達といる時と比べて硬くなる。

それなのに、今まで転校先見てきたような好奇の目や畏怖の目とは違って、彼女のそれは不思議と秋良が馬鹿に出来ないような瞳であることだけは確かなのだ。

だからといって秋良が話しかけたり、みどりの方から話しかけてきたりというようなことはない。しかし、それだからこそ秋良は彼女の存在を必要以上に意識してしまい、たまに行動を共にするような事があれば、非常に気まずい思いを抱くはめになるのだった。

それはみどりの方も同じだったのか、出会い頭に一瞬戸惑うような表情をするみどりは、気まずげに「おはよう」「や」「ばいばい」を口にするものの、決して挨拶以上の交流を図ろうとはしなかった。

そんな日々を送り、いつのまにか一ヶ月が過ぎようとしていた。

1 ファーストインパクト（後書き）

秋良高馬は、某サッカー漫画のキャラのオマージュです。気付いた方、申し訳ありません。土下座して謝ります。

2 バッドコミュニケーション

近所の商店街でバイトを頼み込んできたものの、全て空振りに終わって腐っていた秋良は、父が家に戻るまでの間、アパートの空き地でヘディングして時間を潰していた。

サッカーボールは秋良にとって優秀な遊び相手であり、唯一の充実感を与えてくれる物だった。

物心ついた頃からサッカーボールに慣れ親しんできた秋良は、テクニクをみがいてはいるものの、それを誰かに披露するようなことはしなかった。まして、サッカークラブや、サッカーで遊んでいる少年たちの輪に加わるなどしようとも思わなかった。

何故なら、どこにいようと秋良を受け入れる輪がないことを直感で悟っていたからだ。

同年代の子供たちと秋良のサッカーに対する思い入れは微妙に食い違っていて、それにより人と楽しもうとは思えなくなっていた。

暗闇が町を覆い、ボールの影が地面に濃く浮かぶ頃、そろそろ引き上げようと思った秋良はボールを一際高くあげて、右ひざでキャッチし、更にワンバウンドさせて軽く前方に蹴った。

すると、ボールは向かいのアパートの開いていた窓に見事に吸い込まれて、畳の上を5、6回跳ねたあと、静かに転がって壁際に収まった。自分もその後が続こうと窓枠に手をかけようとしたとき。

ガサツ。

後方から、気配の動く音がした。

秋良は咄嗟に振り返った。

後方に積み重ねられている木材の向こう側に、誰かの影が見える。

秋良は不気味に思っ、それを振り払うように声をかけた。

「誰や」

不安からかつい声が荒っぽくなる。

木材の隙間から微かに見える影は、びくっと反応して小さく声をあげた。

「あ、あの」

聞き覚えのある声だが、誰かまでは特定できない。だが、知り合いだということが分かると不安が取り除かれ、逆に誰なのか確かめたいという重いが湧いてきた。けれど、声の主は動こうとせず、仕方なしに秋良木材の裏に歩いていくと、そこには予想外の人物が立ちすくんでいた。

「お前：こないなとこでなにしてんねん」

秋良の驚いたような声に、所在なげな瞳をよこしたのは、隣の家に住む七倉みどりであった。

塾かなにかの帰りなのか、両手で抱きしめるように平べったい茶色の鞆を持っている。

「ごめん、あの、覗き見するつもりはなかったんだけどね、話しかけるタイミング逃しちゃって、結果的には覗き見てただけど…」

強張った笑みを浮かべたみどりは、まくしたてるようにしゃべり始めた。

「今日、ピアノ教室に行くはずだったんだけど、どうしても行ききた

くなくてね、でもどこに行けばいいのかも思い付かなくて、家のまわりぶらぶらしてたら高馬くんがボールで遊んでるの見かけて、なんか意外だなんて思ってた。見てたら、ボールがずっと地面に落ちないからいつ落ちるんだろうって思ってた。見てたらそのまま……」

別にそれほど後ろめたい行動でもなかったはずだが、彼女にとって覗き見するという行為はまれなことだったらしく、やたらと申し訳なさそうに状況を説明していた。

秋良はみどりが自分に対して挨拶以上の言葉を話しているのが珍しく、なんとなく見守ってしまった。それからみどりは、ピアノが好きじゃないことや、その原因がピアノの先生にあることなど、しなくてもいい話まで全て語って聞かせた。その長い説明が終わる頃には、既に日が暮れていた。

「……………」
「……………」

いったん話が途切れると、いつもの気まずい空気が二人を包んだ。秋良にとって、みどりが自分を覗き見ていたことは別に怒るようなことではなく、どうでもよい事だった。邪魔したり五月蠅くしないのなら居ないのと同じだ。みどりがどういいう経緯で、どういった考えで見えていたかなどは関係ない。興味もなかった。

「そろそろ父ちゃん帰ってくる頃や。ほな」

本当は父がいつ帰ってくるかなどは知れたことじゃないのだが、秋良はそれを口実にして帰ってしまおうと思った。

これ以上ここにいる理由もないし、覗かれていたからといって特に言うべきこともない。

再び背を向けると焦ったように「待って」という声が聞こえてきた。

「なんや、まだしゃべることあるんか」

面倒そうに振り向けば、逡巡したような表情のみどりが立っていた。

「あの、…その」

はっきりしないみどりの声に、秋良は苛立った。

「はよう言っただってくれへんか。俺ははっきりせんのが一番腹立つねん」

すると、みどりはごくんとつばを飲み込んで、意を決して言った。

「あのさっ、みんなと一緒にやってみたらどうかな？」

「はあ？なんのこっちゃ」

「だから、サッカー！」

興奮したようなみどりの声に、秋良はぴくりと眉を跳ね上げて目を細めた。

みどりはそんな秋良の様子には気づかず、興奮を抑えきれないのか早口でまくし立て始める。

「私、サッカーのことなんてよく分からないけど、でもそれでもすごいよ、高馬くん。」

どうやったら一回も地面に落とさないでボール上げられるの？それってさ、みんなに見せたら絶対びっくりするよ。好きなんですよ、

サッカー？だったら、こんなところで一人でやってないで、みんなであれがいいじゃん。きつともつと楽しいよ。私、サッカークラブの子に友達いるから、紹介してあげるよ」

みどりは、それを、まるで自分が楽しくなることのように話して聞かせた。

秋良は急激に怒りと軽蔑が湧いてくるのを感じた。

「そんな俺の勝手やろが。よう分からんのやったら余計な口出しすんな。迷惑やぜ」

冷たい秋良の一言がよほどショックだったのか、みどりはそれまでのはしゃいだ様子をぴたりとやめて凍りついた。

「え、で、でも、だってさ…」

不自然な微苦笑を貼り付けさせるみどりに、秋良は容赦なく畳み掛ける。

「大体な、何を基準に楽しいと思えるんや。こん町のサッカークラブの試合は越してきた日に見さしてもらたが、あんなサッカーにもなつてへん、ただの玉蹴り遊びやないか。あんなしょうもないチームに混ざれやと？冗談やない。寝言は寝てから言うてくれ。ほなな」

にこりともせず、早口で言い切つて、踵を返す。

罪悪感は微塵もなかった。秋良の事情など何一つ知らない癖に興味半分に面白がっている少女の鼻を明かした爽快感でいっぱいだった。

言いたいことを全部言えてすっきりした。

だが何故か妙に胸がざわついているような気もした。

「なによ、えばりんぼ！」

数歩もいかない内に少女の高い大きな声が背中に叩き付けられた。

「なんやと」

振り向いて牙を剥く秋良に、みどりは怯むことなく詰め寄った。

「あんたって何様のつもりなの？そんなにサッカーが上手いのが偉いわけ？そんなに、お母さんがいないのが特別なワケ？二人暮らしで大変って周りに言いふらしたいわけ、自慢したいわけ！？あんたがそんな風だったら、いつまでたっても友達なんか出来ないんだから！」

その言葉で、秋良は完全に頭に血が上った。

みどりの白いセーターの襟ぐりを掴むと、乱暴にぐいと引き寄せた。

「やかましいわい！俺が友達出来ようが出来まいが、サッカーやろうがやらまいが、お前には一切関係ないんじゃボケ！目障りなんやったら近寄ってこなかったらエエやるが！俺かてそっちのがせいせいするわ！分かったら、二度と俺に知った口きくんやないでっ」

そこまで言うと、秋良は突き飛ばすようにしてみどりの襟元から手を離れた。

よろめいたみどりは、目にいっぱい涙を浮かべて、悔しそうに言い返してきた。

「なによ…っ。確かに関係ないわよっ、口もききたくないし顔も見たくないわよ！だけど、私はあんたのクラスメートで、お隣さんで、嫌でも一緒にいなくちゃいけないのよ。それなのに、高馬くんがそんなだったら、あたしは、みんなだって嫌いなままじゃない。そんなの、なんだか…。高馬くんだって嫌でしょ？だからっ…」

秋良は遮るように言った。

「でっかいお世話や。いい子ぶりたいんやったら他あたってくれ」

憎々しげな一瞥をやると、みどりは眉間に深く皺を刻んで睨んだ。

「分からず屋！高馬くんなんて…」

「それと！軽々しく人の名前呼ぶんもやめろや。吐きそうになる」

またも遮って、いかにも気持ち悪そうな顔で言い捨てると、秋良はもう振り返ることなく窓を跨いで部屋の中に入った。

窓を閉めるとき「バカ秋良！二度と名前なんか呼ぶか！」という罵声が聞こえてきたが聞こえないフリをしてぴしゃりと窓を閉めた。

第二印象は、最悪のものとなった。

3 マフラー

いつものことではあったが、秋良は半ばうんざりしていた。

朱に交われない者をいたぶろうとするのが人間の本能なのだとしたら、人間とはなんとおろかで馬鹿な生き物なのだろう。

幼いながらそんな風なことを思った秋良は、だから軽蔑というよりはむしろ憐れみに近い眼差しでもって、取り囲む者達を見回した。

「お前、いい加減にしろよ。こっちが優しくしてやりやつけあがりやがって」

「お前みたいな貧乏人相手に俺たちが相手してやるなんざめったにないことなんだぞ」

「ほら、さっさと金出せよ。そしたら帰してやるから」

なんと支離滅裂な要求を差し出したそいつらは、秋良より一学年上の、近所でも有名な問題児三人だった。

ケンカに勝つことが強く、負けるものは皆弱虫で、逆らった者は痛めつけられて当然と思っているような奴らだった。

秋良はそんな奴ら関わるのは時間の無駄とばかりに、なるべく避けようとしていたのだがクラスでも異質な秋良は傍から見ればそれ以上目立つ存在だった。

それ故、目をつけられるのは当然の結果といえた。

そして運悪く下校中に、それも周りに誰も見かけないような道で問題児達と出会ってしまったのだ。

己の不運を嘆きつつも、秋良は深い溜息を吐き出して睨んだ。

「貧乏人と分かつてる様な奴相手に金たかるんが、そないに優しいことやったとはな。なんとも親切な話しや」

「なんだと、このヤクザ野郎！」

「いいから早く金出せよ！じゃねえとひでえぞ！」

「自分の立場分かつてんのかよ！」

脅しや罵声にしても酷いものだ。どうやらヤクザ野郎というのは、やくざ＝大阪弁という安易なイメージから吐き出されたものらしい。

もつとうまい言い回しは出ないものかと、これだから東京モンはという蔑みの眼差しを投げた。

「分からんお人らやな。貧乏人言うんは金ない奴のこつちや。日本語も分からんような奴らに出す金なんぞ1円もない言うてんねん」

「なんだとー！」

「もう許さねえ！」

「半殺しにしてやる」

案の定襲い掛かってきた三人の上級生を、秋良はひらひらと軽いステップで避けた。

彼らは虚しく空を切る腕の音にさらに腹をたて、血走った目で避けた秋良の後を追った。

秋良は走り出した。

どうせ誰もついてはこれまいと、高をくくっていた。

その通り、三人の問題児たちは、腕力はあるかもしれないが、秋良の足には敵わないようだった。

これで平穩無事に家に帰れると、三人の足の遅さに感謝しているときだった。

するり。

身につけていたマフラーが、解けて舞った。

「あつ」

まずい。

すーすーする首元の肌寒さに青ざめながら、秋良はあずき色のマフラーを横目で追った。足を止め、マフラーの落ちている後方まで急いで戻り、拾い上げた。

だが、それをジャンパーのポケットに無理やり押し込めようとした時、秋良より一回り太い腕が、無情にもそれを阻んだのだった。

「おっと、なんだそりゃ」

はっとして上を見上げた秋良の視界には、汗だくになりながらも厭らしい（あるいは彼らにとっては余裕の）笑みを貼り付けた問題児の顔が映った。追いつかれてしまったのだ。

「チツ」

逃げようと踵を返したが、既にもう一人が回りこんで退路は塞がれていた。

形勢逆転したと思ったリーダー格の少年が、嘲笑して秋良の足を引っ掛けた。

「うあ」

背中を見せていた秋良は為す術もなく転がされる。

ぎゃはははという馬鹿笑いが起こった。

カスガ、と心の中で罵倒しながら、秋良は逃げ出す隙を見計らっていた。

「おいおい、なんだこのきつたねえマフラー！」

秋良は、はっとしてポケットの中を探った。

薄い科学繊維の感触はない。

焦って視線をさまよわせると、数歩先の地面に、それはくたつと力なく横たわっている。

掴もうとした矢先、マフラーは自分ではないものの手によって掬い上げられた。

秋良はかっとして言った。

「汚い手で触るなやボケェ！」

叫んだ秋良の顔を、リーダー格の少年が容赦なく蹴った。

「ぐあぁっ」

物凄い衝撃と痛みが顔面を襲い、秋良は再びその場に転がった。

ぼとりと血の塊が鼻から垂れた。

だが秋良にはそれを気にしている余裕はない。

何故なら、あのマフラーは、カスに触らせていいものではないからだ。

「か、返せやつ…」

必死に足にしがみつく秋良を嘲笑って、マフラーを手にした少年は秋良の体を踏みつけた。

「おいおい、貧乏人はこんなぼろっちいマフラーにも必死になんなきゃいけねえのか？」

「かわいそうだから、今日は金の代わりにこのぼろっちいマフラーで許してやるうぜ」

「しかたねえな、貧乏は」

そう口々に言って笑い合つと、少年たちはマフラーを持っていこうとした。

どうやら、問題児達は金が欲しいというより嫌がらせをしたいただけらしかった。

秋良はしかし、それで引き下がるわけにはいかなかった。

勝ち目も意味もないケンカをしても、マフラーだけは譲れない。

じり、と起き上がって、秋良は啖呵を切った。

「待てや、クズどもがあつ！貧乏人にまで金たからなアカンほど飢えてるんやったら、ワイが相手したるわ！はよこんかカスつ！！」

子供とは思えぬほどの迫力がこもった啖呵に、三人はすぐさま振り返った。

「なんだとコラア！」

「そんなに殺されてえかよ！」

「顔変形するまで殴ってやる！」

秋良の啖呵に得体の知れない怖気を感じながら、三人はその怖気にすら怒りを覚えて襲い掛かる。

秋良も、すでに後のことなど考えていられなかった。

とりあえずマフラーさえ取り返せばいい。

保身など頭になかった。

「来いや、コラ！」

しかし、次の瞬間全員が動きをとめることになった。

「せんせえーっ！高岡先生、こっちです、早くー！！」

少女のものと思われる金切り声が秋良の後方から響いてきた。

振り返つてみると、30mほど先に七倉みどりの姿があり、こちらと後ろを交互に見ながら、大きく手を振ってもう片方の手でこつちを指差していた。

「やつべ、高岡！？バレたら今度こそ…！」

「おい、早く逃げろ！」

「あ、待って！」

少年たちはクモの子を散らしたように逃げ去った。

秋良はその間、ピクリとも動かずに、走ってくるみどりを見ていた。後ろから来るはずの高岡教諭の長身は、しかしいつまで経っても来る様子がない。

「はあっ、はあ…っ。よかった…間に合った」

みどりは、腰を曲げ、膝に両手をついて息を整えると、顔を上げて秋良に向き直った。

「…偶然見つけてさ。あいつら高岡先生の名前出すと逃げるんだよ」

要するに、みどりが機転を利かせたらしかった。

「あ、血。すごい出てる」

呆然としていた秋良は、みどりがポケットからハンカチを取り出して自分の鼻の周辺を拭こうとしているのに気づいて、とっさに手で払った。

「あつ」

水色のハンカチは、ふわりと地面に落とされた。みどりはそれを見送ると、無言で秋良を睨んだ。

「……………」

秋良も静かに睨み返す。

だが、みどりは怒りを抑えるように素早くしゃがんでハンカチを拾い……………」

そしてその視線の先に、あずき色のマフラーが落ちているのを見つけた。

秋良もそれに気づいて、みどりが手を伸ばして触れようとする寸前にそれをかすめ取るように拾い上げた。

しゃがんだままその素早い動作を見たみどりは、非難の色を浮かべた目で頭上を睨んだ。秋良はそんなみどりの目から隠すかのように、くしゃくしゃにまとめたマフラーと一気にポケットに押し込んだ。

「余計なことしゃがって…。イイことしたつもりか？」

秋良は、ことさら視線を険しくすると、子供とは思えないほど低い声のみどりに投げた。

「礼なんぞ言わんからな」

すると、みどりはぱっと立ち上がって、堪りかねたように詰め寄った。

「あんたからお礼言われなくてしたわけじゃない！あんたが痛めつけられてるのを見捨てたくなかったただだよ。そんなマフラーの為にあんな奴ら相手にするなんて、何考えてんの？」

次の瞬間、秋良は目いっぱい腕を振り上げていた。
無意識だった。

パンツ。

乾いた音が二人の周りに響いた。
強いようで、それほどでもないような音だった。
みどりは、左頬を押さえて呆然と秋良を見詰めていた。

「お前なんぞに…お前みたいなお嬢に、何が分かるんや！」

ぎりつと噛み締めた歯の隙間から、憎しみとも悲しみともつかない感情に濡れた声が漏れた。

その声を受けたみどりは、大きな黒目がちな目から、ぼろと涙を溢れさせた。

きらりと光った軌跡が頬を押さえている手の中に消える。

秋良は、その光から逃げるようにして、だっと走り出した。

おもむろにポケットに突っ込んで握り締めたら、マフラーはくしゃりと悲鳴をあげた。

秋良はそれこそ、こちらが悲鳴を上げたい気分だった。

3 マフラー（後書き）

こいつらは小学生じゃないですね、きっと

4 アイデンティティ

問題児に絡まれた日から数日後、秋良は非常事態に陥っていた。マフラーが、なくなったのだ。

絶対に無くしてはならず、絶対に手放してはならないものだった。あれから、秋良はまた問題児達に絡まれたときのために、マフラーをつけないようにしていたのだが、冬の木枯らしが身に染みるこの時期、食料もままならない生活を送っている。秋良が、他の防寒具を買い求められるはずがなかった。

その上、父親があてにならないのは分かりきったことだ。仕方なしにその日はマフラーを身につけて登校したのだが、体育を終えて教室に戻り、着替えていると、マフラーがないことに気づいた。

秋良は探し回り、クラスの全員に知らないかと聞きまわった。終いには先生にまで訴えたが、とうとう見つからなかった。クラスメイトたちは、マフラーがなくなっただぐらいで取り乱す秋良を物珍しげに見ていたが、誰も探すのを手伝おうとはしなかった。みどりも、そんな秋良をじっと見ているだけだった。

アパートに帰った秋良は、座り込んだままじっとしていた。どこをどう探してもマフラーは出てこなかった。

諦めるという選択肢はないものの、ここまで探して見つからないとなるとさすがに疲れが出た。

次第にどうでもいいような気もしてきて、家に帰った。

すると、人気のないがらんとした部屋にさらに嫌気が差して何をやる気も起きなくなった。

座り込んで数十分後、窓の向こう側から、いつの間にかしとしと
いう音が聞こえてきた。
気づけば、すえた様な、生臭い様な匂いが、どこからか部屋に侵入
している。

うんざりとした。

雨の日は大嫌いだった。

洗濯物は乾かないし、サッカーだって思うようにできなくなる。

何より、気分を最悪にさせるような湿気た空気が堪らない。

「今日は厄日かい」

ははっと笑って、咳くとさらに気分が落ち込んだ。

父が大事にしている秘蔵の酒を割って憂さ晴らしでもするか、と立
ち上がったとき、ドンドン、と扉を叩く音が狭い部屋に響いた。

それほど強くもない調子だったのだが、期限の悪い秋良には途方も
なく耳障りな音となって聞こえてきた。

「誰や！」

自然と口調が乱暴になるが、構わなかった。

今日は誰とも話したくない。

怒って帰ってくれるのならそっちのほうで秋良にとって万々歳だっ
た。

「私……七倉」

小さな声だったが、薄い扉越しには十分聞こえる声が届いた。

相手を知るなり気分が最低に達した。

秋良は、これ以上があるか知らないが、それでももう気分を滅入ら
せたくはなかったので、

無視を決め込むことにした。

みどりと会ってしまえば更に最悪なことになるのは目に見えていた。七倉みどりは、秋良とどうあっても馬が合わない人間だと、これまで嫌というほど思い知らされているのだ。

「ねえ、開けてよ」

図々しい言葉が、独り言のようにくぐもって聞こえてきた。誰が入れたるか。

心の中で毒づいて秋良は座りなおす。

みどりは何の反応も返ってこない様子に観念したのか、「分かった」と言っ

「じゃああなたの探してたもの、私がもらっから」

それを捨て台詞に、みどりは帰ろうとした。

「なんやと」

秋良は聞き捨てならないと、すぐさま追いかけようと腰を浮かせた。

がしかし、もしかしたら自分と顔を合わす為の方便かもしれないと立ち止まる。

けれど、みどりが立ち去ろうとしていることを表すぎしぎしという廊下の軋みが耳に届くと、秋良は反射的に部屋を飛び出していた。

「おい！」

秋良はすぐにみどりに追いついて呼びかけたが、みどりは気づかないかのように

すたすたと外へ出ようとしている。

「ちよお、待てや!」

憤慨して、肩に手をかけて強引に振り返らせた。

無然とした表情のみどりは、そこでようやく立ち止まった。

「なによ」

挑戦的な声だった。

秋良はさらにむかっときて声を荒げた。

「ほんまに見つけたんやろなっ」

するとみどりは、すっと通った鼻筋の付け根に皺を寄せて、水色の小さな紙袋を

秋良の胸に強く押し付けた。

「本・当・に、見つけたわよっ、はい!じゃあね!」

そうして、みどりはさっきよりもさらに肩をいからせて早足で行ってしまった。

秋良は、苦虫を噛み潰したような顔になって、上下に激しく揺れる背中を見送った。

受け取った紙袋を見下ろすと、中から安っぽいあずき色のマフラーがのぞいていた。

取り出して確認すると、確かに自分のものだった。

端の方に、白い糸で小さく名前が縫い付けてあるからだ。

秋良はそれを見るとほっとして、思わず表情を緩めた。

胸の中に、表現し難い様々な感情が溢れて、さっきまでぼっかりと

穴が開いていた心が急激に満たされていくのを感じた。

中でも一番大きいのは、深い安心感だった。

それが分かると同時に、ふとみどりの顔が思い浮かんだ。

秋良が声をかけたとき、みどりは怒りの表情を顕わにしたが、秋良はそれだけではなかったような気がしていた。

目の奥で、傷ついたような悲しみの光が宿っていたようにも見えた。

そこまで考えて、秋良は、くそつ、と毒づいて急いで消えた背中を追った。

アパートを出ると、そば降る雨の中、みどりはすぐに見つかった。

彼女は何故か、傘も差さずに道の途中で立ち止まっていて、目の前に見える家に入ろうともせず、雨に打たれていた。

秋良はなんとなく声をかけづらい雰囲気、躊躇いを覚えて、自分も何分か背中を見続けていた。

「……どこに、あつたんや」

ようやく声をかける決心がついたのは、水に飛び込んだように全身が濡れになった頃だった。

みどりはびくっと肩を震わせると、ゆっくりと秋良の方に向き直った。

驚いたように目を見開かせているので、どうやら秋良がいたことに気づいていなかったことが窺われた。

みどりは濡れて張り付いた髪の毛を気にもせず、僅かに唇を震わせている。

そのまま何も言わないので、秋良もさすがに居心地が悪くなったとき、みどりは口を開いた。

「その…マフラーさ、なんでそんなに大切にしてるの？」

それは質問の答えではない。

秋良は横を向いて視線を逸らす。

みどりはその様子に、軽く溜息をついた。

「また無視？…いいけどさ」

嫌われていることを知っている者特有の、投げやりな声だった。

「秋良くんて、自分がどれだけ目立つか分かってる？そうやって、自分のことは誰にも分からせないって態度がどれほど悪目立ちするか。…それが秋良くんのやり方だっていうなら仕方ないけど、大切にしたいたいものがあるならもう少しうまくした方がいいよ」

「…なんやそれ、説教か」

「そうじゃないって！ただじれったくて見てられなかったから…」

もどかしそうに告げるみどりの瞳には諦観の眼差しがあった。

「まあ、確かに私が口出しすることじゃないけどね。…それ、早引きした松田くんが間違っって持ってっちゃったんだって。今度はランドセルの中に入れておいたら」

秋良は、すっかり水を含んで黒い色になったマフラーを見下ろした。

松田という奴がどういふ顔の奴かは、おぼろげにしか思い出せない。

けれど、あずき色なんて趣味の悪いマフラーをしている人間がクラス内にいるとは、秋良には思えなかった。

だがそれもまた推測に過ぎないのだ。

するとみどりの言ったことが、染み入るようにじわりと秋良の心に

入り込んできた。

『大切にしたいものがあるならもう少しうまくした方がいいよ』

認めたくない。

こんな奴の言うこと。

しかしそれは、どう否定しても正論だった。

「…七倉」

寒さに震え、かすれた声は、数歩先に進んだみどりにかろうじて届いたようだった。

「なに？」

みどりが振り返ったのかどうかは、俯いているため分からない。

それでも、秋良は口にした。

「おおきに」

ザー。と音をたてる雨は、秋良の声を遮ったかのように思われた。だが、陰鬱な空気を晴らすような「うん」という澄んだ声が聞こえてきて、それきりあたりは雨音に包まれた。

秋良は結局、みどりの顔を見送ることができなかった。

何故かそれが、どうしようもないほど悔しかった。悔しくて堪らなかった。

まるで痛いしつぺ返しを食ったような気がした。

その思いを噛み締めて、重い足取りで震える体を引きずり、アパートに戻った。

気分は、みどりが来訪した時よりも最低に達していた。

5 ファーストコンタクト

雨の別れから、二人の仲が良くなるようなことはなかった。

しかし、何がしかの接点のようなものは、以前より多くなったかもしれない。

少なくとも、秋良はそんな気がしていた。

例えば秋良家の食生活を心配したみどりの母が、みどりに料理を届けさせたりだとか、回覧板をみどりが届けに来るようになったりだとか。

その事実があるだけで、そこから何かが芽生えるわけではない。

けれど、そんなことが続くと、秋良はいつしか嫌悪感なくみどりの来訪を受け入れるようになっていた。

その頃から、みどりは秋良を「秋良」と呼ぶようになった。

くん付けされるのが気持ち悪いと言ったら、遠慮なしに呼び捨てにしてきたのだ。

二人が顔を合わせると大半がケンカ別れで終わったが、その交流の中でも、二人が得るものは多少なりあった。

互いのやり方を否定しながらも、それを徐々にではあるが受け入れられるようになっていった。

それが、多分最初の一步だった。

「…おい。それどないした」

聞くまい聞くまい、と思っていた秋良だったが、ついに好奇心が理性を上回った。

いつものように回覧板を届けに来たみどりが、玄関先で目を丸くしたのが分かった。

「なにが？」

みどりは、心底不思議だとも言うようにまじまじと秋良を見た。恐らく、普段意図して話しかけないようにしている秋良が、みどりの様子を聞いてきたのがよっぽど予想外のことだったのだろう。

秋良は自分が一瞬で珍獣にでもなったかのような気分になり、撫然として回覧板を受け取った。

だが、目をまん丸にしているみどりの口元を再度見ると、やはり言わずにいられなかった。

「口の端んとこ。切れて血出てんで」

そっぽを向いて言うと、みどりははっとなってぐいっつと唇を拭った。

強い調子だったので傷に障ったのか、「イタっ」と言ってみどりは口元を抑えた。

「アホ。そないにぐいぐい押し付けたら痛むの当たり前やろが」

秋良の呆れた口調にむっとしたようだが、みどりは反論してこなかった。

見かねた秋良は「ちつと来い」と言って強引にみどりの腕を掴んで部屋の中に引き入れた。

「え？ち、ちよつと？」

戸惑った様子のみどりに構わずに、秋良は部屋に唯一生活感を与えている戸棚の中段を「そこそと探り出した。

秋良が目的の物を見つけて振り返ると、みどりは手持ち無沙汰にサッカーボールを転がして遊んでいた。

秋良は近づいてさりげなくボールを取り上げ、みどりの前にどん、と木箱を置いた。

緑の十字マークが描かれたそれは、どう見ても救急箱のようだった。

「秋良？」

みどりは、救急箱とみどりの顔を交互に見て、それから首を傾げた。

救急箱が出てきたとなると、それが何を意味するのか流れからいつてみどりに分からないわけがなかった。ただ、あの秋良がまさかという思いが邪魔をして事の成り行きに思考が追いつかないよいだった。

秋良は無言で救急箱を開けて丸い缶の塗り薬を取り出すと、蓋を開けて指で掬い取り、それをみどりの口端におもむろに塗ろうとした。

みどりはとつさに避けた。

自然、秋良の指は宙を掻く。

あ、と声をあげたみどりは、どうやら自分の行動に自分で驚いているようだった。

そんなみどりを呆れたように見て、秋良は僅かに眉根を寄せた。

「なんぼなんでも、この状況でカラシ塗りたくるような真似はせんて。

安心して大人しゅう座つとれ」

そして、みどりが体を反らした方へ手を伸ばす。

今度こそ半透明の薬は傷口に塗られた。

秋良は、慎重に、なるべく傷に触れないように、ゆっくりと指を動かしていく。

塗り終わると、身じろぎしたみどりを制して絆創膏を取り出した。包装紙を剥がして再度口元へ手を伸ばし、両手でそっと貼る。

作業が終わると、どちらのものと知れない息が漏れ、空気が緩んだ。

すると、示し合わせたように二人の視線が互いを捕えた。

その時初めて、秋良はみどりの顔をじっくりと見た。

色白の肌と形の良い目鼻立ちの持ち主である少女は、こうして見れば整った顔に見えなくもない。

それだけに、口元の絆創膏というやんちゃなアイテムにはかなり違和感があった。

そんな風に思いながら見ていたら、ふとみどりがなんともいえない表情をしているのに気付く。

秋良が治療を施している間、まるで置物のように瞬き一つせず座っていたみどりは、

治療を終えたにも関わらず未だに体を硬くさせていた。

秋良はそんなみどりの様子がどこことなく可笑しくて、ふっと笑みを漏らした。

すると、みどりの顔はたちまち真っ赤になった。

どうしたことかと秋良が目を見張ると、みどりは慌ただしく立ち上がって玄關へと向かう。

心なしか逃げ出すような行動に見受けられた。

「別に、こんなのほっとけば治るよ」

靴を履きながらそう言ったみどりの言葉は、秋良にはあんだ一体どうしたのと言っているかのように聞こえてきた。

「ま、いつも食いモン貰つとるしな。お前の母ちゃんの手間はぶい

たったただけや」

「これぐらいは自分で出来るわよ」

怒ったような声で顔を向けず言い放つみどりを、秋良は戸惑いながら見やった。

何故そんなにむきになるのかさっぱり分からない。

感謝されこそすれ、怒られるようなことをした覚えは全くないのだ。

「なに怒ってんねん。相変わらず可愛くないやつちな」

「怒ってない！」

そう叫んで、みどりはドアを力任せに開けると振り返らず帰っていった。

開けっぱなしのドアを渋々閉めながら、秋良は行ってしまったみどりの態度に首を傾げる。

「思つきし怒つとるやんけ……」

遣る瀬ない怒りを抱いた秋良だったが、すぐに同時に湧いた疑問の方へ興味が移った。

治療を施す事の、一体何がそれほど癪に障ったのだろうか。

それに、聞きたかった傷の理由もそういえば分からず終いのままだ。もしかして誤魔化された？

腑に落ちない点がいくつも浮かんでくると、秋良は段々と考えるのが面倒になってきた。

そもそもみどりの事情など秋良には関係のないことであり、どうでもいい事のはずだ。

あの様子だと、食い下がったところで教えて貰えそうもないみたいだし。

確かにみどりの言った通り、放っておいても構わないような傷だったのだ。

理由もどうせ些細なことに違いない。

そう判断すると秋良はもう気にしないことに決めた。

余計なことをしたと後悔したが、終わってしまったことなのでこれもまた気にしない様にする。

救急箱を片付けて部屋を見渡せば、殺風景な中に白黒のボールがぼつねんと寂しそうに転がっているのを見つけた。

気を紛らわせるため、ボールの相手をしてやることにした。

外へ出た秋良はすぐさまボールの相手に夢中になった。

だから、みどりとのお些細なやりとりなど、10分後には綺麗さっぱり忘れられたのだった。

6 トラスト

その傷を嫌でも気にするはめになったのは、それから三日後のことだった。

パンをかじりつつ家を出た秋良は、アパートの前を丁度みどりが差し掛かるのを見かけた。

秋良はなんとなしに「おはようさん」と声をかけたが、みどりは振り向きもせずに通り過ぎていく。

それは無視されたというよりも、気付かれなかったという感じだった。

だが、5mと離れていない距離で声が届かないはずはない。不思議に思っ、秋良はみどりを追い越してその進路に立ち塞がった。

「寝ながら歩いとるんか」

さすがに至近距離では耳に入らざるを得なかったのか、みどりはびくっとして秋良を見た。

「あれっ、秋良？おはよう。いつからいたの？」

「お前が俺んちの前通り過ぎたあたりから」

「そうだったけ？」

まったく気付いていなかったらしいみどりは、きょとんとした顔で秋良を見た。

「アカン、完全に寝ぼけと…」

るわ、を口にする前に秋良は見つけてしまった。
少女のとぼけた顔にある、異質なものを。

「お前、それ…」

みどりは、秋良の視線の先を知ってはつととなった。
そして唇を噛んで素早く顔を反らしたのだった。

みどりの一方の口の端には、三日前に秋良が施した治療のあとがあつて、すでに完治しかけていた。だが秋良が目を見張ったのは、そのもう一方の口端だ。

また新たな傷が増えていた。

それも、青痣の浮かんだ、以前より醜い傷が。

「な、何でもないうって。夜中にトイレに起きたらさ、寝ぼけて柱にぶつけちゃったの、はは」

傷を見せまいと顔を反らしてそう言ったみどりは、不自然に笑い飛ばした。

みどりなら有り得ると思いはしたが、秋良もさすがにそれを信じるほど愚かではない。

何より、気まずげな表情が嘘だと告げている。

「それ言い訳にすんのは苦しいやろ。なんや、父ちゃんにでも殴られたか」

まさかみどりの父が秋良の父のように酒乱だとは思えなかったが、差し当たって他に思いつくような原因も浮かんでこなかった。

みどりは曖昧な笑みを浮かべて「うん」とか「まあ」とか、もごも

ごと答えた。

そして、これ以上は聞くなとばかりに、早足で秋良を追い越して行ってしまったのだった。

秋良は、納得のいかない気持ちで赤いランドセルを見送った。

けれども、みどりと仲のいい友達はたくさんいるので、そいつらが聞き出すやろ、と一瞬後には思い直す。

そして、自分も行ってしまった少女の後に続いたのだった。

冬休みの近づく学校は全体的に浮ついている。

話題といえばもっぱら冬休みの予定や家族旅行の行き先、そしてクリスマスプレゼントだ。

もちろん秋良はそんな輪の中に加わることなく適当に相槌打っていたが、意識は常にみどりの方へ向けていた。

だが結局最後の授業が終っても、まだみどりの傷の原因は謎のままだった。

みどりは笑いながら仲の良い友達と話していたが、話題が傷の事になるとはぐらかすので誰も深く追求出来ないらしかった。

秋良は、そんなお手軽な扱いを受けているクラスメイトたちに、なんとなく苛立ちを覚えていた。

帰りの会の終了直後に、担任の先生がみどりに何事か尋ねていた。

秋良は今度こそビンゴだとアタリをつけたが、そばだてた耳に聞こえてきたのは、今朝とまったく一緒の下手くそな作り話だった。

こうなったら最後の手段しかないか。

秋良は仕方なしに、自分から理由を聞くために、校門でみどりを待つことにした。待っている間、なんで自分がこんなことしなければならぬのかと馬鹿馬鹿しくなったりもしたが、気になるものは気になると観念して待ち続けた。

しかし、待てど暮らせどみどりは校門に現れない。

とうとう、校門には誰も通りかからなくなってしまった。
もしかして。

秋良は不安になって昇降口まで戻った。
自分のクラスの下駄箱で七倉みどりの名前を探した。

「なにしてんねん、アイツ……」

みどりの靴入れは見つかった。しかし、外履きの靴入れは空っぽになっっていた。

秋良の読み通りだとすると、みどりは、秋良のいた正門ではなく、裏門から帰ったのだ。

秋良は舌打ちして、すぐさま裏門の方へ駆け出した。

裏門は、そちらの方が近道になる少数の生徒しか足を向けない。

だがみどりは、秋良と同じ方向なのだから裏門には用がないはずだった。

まさか自分を校門に見つけて避けて通ったのではとも秋良は考えた。

だがすぐにそれはないかと思いつくことになる。

みどりが秋良を避けて逃げる姿を、あまり想像できなかったのだ。

いつも以上に人気のない、というより無人の侘しい裏門が見えてくると、秋良はいったん足を止めて呼吸を整えた。

大きく深呼吸して再び腹に力を込めようとしたとき、どこからか男子のものと思われる低い唸り声が聞こえてきた。

知らずそちらの方へ足を向けた秋良は、段々と近づくにつれ、それが聞き覚えのある人物の声だということに気づき驚く。

それは出来ることなら思いだしたくない、一生聞かなくてもいい声だった。

「いい加減にしろなあ？お前、誰に向かって口きいてんだよ」

「いくら女子でも、俺たちが手加減すると思ったら大間違いだぞ！」

「分かったらさっさと金よこせよ」

その子供らしからぬ潰れた低音は、裏門の壁の裏から聞こえてきた。

間違いない。

それはあの問題児三人組の声だった。

秋良はなるべく音をたてないように、息を殺して静かに近寄っていた。

ようやく壁一枚を挟んだ距離まで近付いた時だった。

突然、到底信じられない人物の声が響いてきた。

「あんたたちみたいな最低な奴らにこれ以上出せるお金なんてありません」

凜として、辺りを涼やかにするような澄んだ声。

それは紛れもなく、隣家の住人であり探していた少女、七倉みどりのものだった。

(どういうこつちゃ!?)

どうもこつちも、みどりが絡まれているのだということは明白だ。

しかし、この問題児らがよもや女にまで手を出そうとは考えもしなかった秋良だった。

現に今まで、犠牲者となってきたのは男子だけだ。

記念すべき女子第1号がよりによってみどりなどと、一体だれが予想出来ただろう。

加えてみどりは、奴らの標的からもつとも程遠い存在のはずである。

それが、どうして。

金の有る無しでそれに納得しろというなら、みどりより適当な女子は他にいくらでもいる。越してきて間もない秋良ですら分かるほど。

「おい、約束が違うんじゃないかねえか？」

そんな秋良の疑問は、唐突に、それも予想外のカタチで解かれることになった。

「お前がああの生意気なヤクザ野郎の変わりに金払うつっーから、俺らはマフラー返してやったんだぜ？」

(は?)

秋良は一瞬、何を聞いたのかわからなくなった。

「せっかくズタズタに切り刻むとこだったのによ。お前が邪魔してくれたんだよなー？」

「がっかりだったよな。それをたったの10万で許してやるつってんのに」

「高岡にチクろうとか考えてんじゃないかねえだろうな？無駄だぜ。」

俺のダチらがちゃんと見張ってくれてんだから」

「……」

「なんだよ、その目」

パァンッ。

「うっ」

したたかに殴られたような音と、みどりの食いしばったようなうめ

き声が耳に響いた。

まるで自分が殴られたかのようながんと頭の揺れている感覚に、秋良は陥った。

まさか。

「なあ、七倉サン。どんな内容だって約束は約束。破ったらどうなるか分かるよな？」

秋良は無意識に首に巻いたマフラーをほどいて、ジャンパーのポケットに詰め込んだ。

まさか。

まさか。

まさか。

「あのヤクザ野郎にも責任とってもらわねーと……」

「待って！分かったわ、あげる、あげるからアイツは見逃してやって！」

せっぱつまったようなこの声は、まさか。

（俺の…ため）

そんなわけがない、と何処かから声がした。自分のようなやつに、なんの見返りもなく身を犠牲にするような者が、いるわけがない。そんな特殊な人間、今まで会ったことも見たこともなかった。

秋良は必死に冷静になろうとした。

冷静になろうとして、いつの間にかポケットに入れたマフラーを力の限り握り締めていた。

「なら早く出せよ、ほらあ！」

ドツ！

「うあー！」

ドサツ。

みどりがボコボコにされてしまう。

状況がよく分からないぶん、秋良の頭には思いつく限りの最悪なイメージが浮かんでいた。

早く助けないと。

だが、それでも秋良の中にはまだ諦めの悪い葛藤があった。なんで他人の為にここまで。

しかも友達でも仲が良いわけでもない奴の為に。

自分にはなんの得にもならんのぜ。

ただのお節介で終わってまうかもしれないのやぜ。まさかこんなボロいマフラー欲しいんか。

違うやろ。

お前が必死になる理由、いっこともないやろが。

みどりの行為は、秋良にとって信じられないほど重く、ありがた迷惑極まりなかった。

ここまでされると、かえって決まりが悪かった。

今の状況はいくら秋良の為とはいえみどりが招いたことで、秋良が気に病むことでも助けてやることでもないのだ。

(そんでもな…)

……けれど。

秋良は、ぎり、と握り締めていたマフラーから手を離した。

『大切にしたいものがあるならもう少しまくした方がいいよ』

いつかの少女の言葉が、胸に広がった。

腑に落ちなかったマフラーの出所。

治療した秋良に怒った理由。

曖昧な笑みで隠した傷の事情。

その全ての答えが繋がった今、秋良のとるべき選択肢は一つしかなかった。

…いや、もしかしたらとつくの昔に決まっていたのかもしれない。

(お前の『うまい方法』なんぞ、さっぱりアテにならんわ)

秋良は、一つ息を吸い込むと、勢いよく駆け出した。

「みどり！」

腹の底から声を出し、名前を呼ぶ。

始めて呼んだその名前を、しっかりと力強く。

「秋良…？」

門を通過して壁の向こう側に躍り出た秋良に、その場にいた一同が振り返る。

秋良はその中に、三人の大きな体の隙間から除いている黒目がちな目を見つけた。

その次の瞬間、秋良は問題児たちに目もくれずみどりの腕を掴んで

いた。

そして間を置かず走り出す。

呆気を取られていた三人組はそこでようやく我に返った。

「こらあ、待てお前ら！」

そう言われて待つ馬鹿がどこにおんねん、と後ろに向かって叫んだ秋良は、すぐ後ろの泣きそうに潤んでいる瞳と目が合った。

秋良は、コクリと力強く頷いた。

すると、みどりはさらに泣きそうになり、顔をくしゃりと歪ませた。

なんだか猿みたいだと思って前を向いた秋良であったが、

それでも決してみどりの手を離すことはせずに、強く握り直したのだった。

7 ラストインプレッション

あてもなくやみくもに走り回った二人は、問題児達の声が消えても走り続けた。

息が限界まで苦しくなっても、秋良は足を止めなかった。

とにかく走りまくって、見知らぬ風景に気付き始めた頃ようやく足を緩めた。

気付けば、後ろから激しい息遣いが聞こえていた。

頭だけを後ろにやると、みどりはもう1mだつて走れなさそうだった。

立っているのも辛いといった様子だ。

それでもみどりから文句のような声は聞こえてこなかったように思う。

秋良はみどりの脚力を考えなかったことを少しだけ悔やんだ。

スーパーの駐車場を見つけた秋良は、そこから倉庫の裏へ入っていた。

そして、スーパーと倉庫の隙間の路地に入ったところで、ようやくと足を休めた。

がっくりと崩れ落ちたみどりを残して、秋良は壁の影から油断なく周りを見渡した。

がらんとした駐車場に三人の姿はない。

どころか、人の影すらなかった。夕飯どきだというのに、余り流行ってないスーパーなのだろうか。

なんにしる好都合だと秋良はほっと息をついた。

「にしても、どこやこい」

聞いてはみたが、声をかけた相手はまだ息を荒げさせていた。相当きつかったようだ。

秋良は持久力に自信があるが、みどりはそうじゃなかったらしい。とはいえ、秋良ほど持久力のある者もそうはいないので、みどりの今の状態は当然の結果といえた。

「…お前あんとき、見つけてきたんやのうて、あいつらから取り返してきたんか？」

みどりの息が落ち着くの見計らって、秋良が唐突に聞いた。みどりからの答えはなかった。

「なんでそこまですんねん。お前も前に言うてたけど、あんなボロつちいマフラーなんぞで傷もろてたらただのアホやるが」

「だって、大事なんでしょう！…よく分からないけど、秋良が大切にしたいものなんでしょう」

突然顔を上げ、食ってかかってきたみどりに、秋良は圧倒された。その強い視線を、今はもう無視することができなかった。はぐらかすことも出来なくて、秋良はとうとう観念して素直に言葉を紡いだ。

「…せや。大切や。ボロでダサイ安物やが、母ちゃんが買ってくれたもんやと思うと、なんや手放せんぞな」

ジャンパーのポケットからずぼと取り出したそれを、秋良はみどりの眼前にかざした。

みどりは、秋良の告げた驚きのエピソードに、丸くなった目を向ける。

「けど、お前に借り作るぐらいなら、もうエエわ。やる」

「はあ？」

「明日、これ持って奴らんとこ行き。こんなモンに10万の価値あるんやったら儲けもんやろ」

おもむろに突き出された拳から、マフラーがふわっと落ちた。

反射的に、みどりは慌ててそれを受け取ってしまう。

「で、でも、大切だって言ったそばから、こんなの受けとれな……」

「ちょお待ち。そん代わり、頼み聞いてもらう」

「え？」

まあ聞けや、と秋良はみどりの赤くなっている耳に唇を寄せた。

秋良の提案と魂胆を知ったみどりは、口元を段々と笑みの形に作っていった。

「…と、いうワケや」

にんまりと笑って「そういう事なら貰っとく」と言ったみどりを、秋良は、案外根性据わつとんな、と感心して眺めた。そして、ゆっくりと、手を差し出した。

「…なに？」

また走るのかと勘違いしたみどりはその手を恐々と見つめた。しかし、頬を少し赤く染めた秋良を見て、表情を改めさせた。

「その…これから、やな。もしあいつらがまた絡んで来るようやったら、言ってこい、ちゅうか……」

物凄く恥ずかしい台詞だったので、いつものように舌がうまく回ってくれない。

そんな自分に舌打ちしながらも、秋良は差し出した手をそのままに、みどりを見つめた。

みどりはポカンと口を開けて見つめ返したが、秋良が冗談を言っているのではないと分かると。

「うん。じゃあこれからは本当のよろしくね」

そう言って、秋良の手をぎゅっと握った。

「は？なんやそれ」

言葉の意味が分かっていない秋良にみどりは挑戦的な瞳をよこした。

「だって今までは、テキトーなよろしくだったんでしょ？」

「あ…」

思い出した。

『それほど仲良くする気もないけど、お隣さんやったらしゃーないし、ま、テキトーによるしゆうしたってや』

お互いに好印象とはいえなかった、あの出会い。

しかし今、意外と根性が据わっていて意外と執念深い夕子の少女を前に、秋良は確かな絆が生まれるような予感がしていた。

クス、と笑って、けれど次の瞬間には睨みを効かせた秋良は、みどりの挑発を受け取ってしつかりと手を握り返した。

「あほ、お前のどこがテキストなよろしくやっちゅうねん。お人好しがよく言っわ」

もちろん憎まれ口を叩くのも忘れない。

「うるさいわね！素直にありがとうって言えないの？」

みどりも負けじと睨み返した。

その展開はいつものケンカの始まりと同じだった。

ただ一つ違ったのは、二人して同じタイミングで吹き出して笑い始めたこと。

「…ぷつ。あははは」「…くつ。ははっ」

それだけが常と違い、それこそがそれまでのぎこちない二人を卒業する証となったのだった。

恐らく初めて互いが互いに向けた笑み。

いつそ怖いくらい、なんの混じり気もない歓喜が二人の内を満たしていた。

涙すら浮かべて笑い合う二人は、けれどすぐに収めざるを得なくなつた。

「あ、まずい…」

最初に気付いたのはみどり。

どないした、と聞こうとした秋良も、ふっと香ってきた匂いに気付いてあつと声を出す。

「雨…」

建物の隙間から除く狭い空を仰ぐと、今にも泣き出しそうな暗雲で塞がれていた。

「早く帰らないと一雨くるよ」

「言つても、ここどこや？お前帰り道分かんのか？」

「まあ、大体は。でもかなりかかるし、着く頃にはたぶんずぶ濡れになっちやうよ」

「ほな、雨宿りでもするか」

この季節にずぶ濡れで帰ったら、いくら丈夫な二人でも風邪を引くのは道理だ。

だがみどりは、

「うーん…。いつか、帰ろうよ」

と事もなげに言った。

秋良はびっくりとした。

みどりの発言にはではない。そう言われて反発心を抱かなかった自分自身にだ。

「帰ろう、一緒に。秋良」

そう言われて、ずぶ濡れになる事を覚悟するなんて、今までなら決してあり得なかった。

だが今、次第に濃厚になる雨の香りをかいで感じるのは、不思議な高揚である。

まさに青天の霹靂だった。

雨は、大嫌いだ。

それなのに今、秋良は、ずぶ濡れで帰るのもいいかと、確かにそう思っていた。

「せやな。…帰るか」

そう言つて見つめた先の、あまりにも印象的な笑顔は、さらなる奇跡を秋良に起こした。

一生に一度しか思わないであろう、嘘みたくに暖かな思いを芽生えさせたから。

明くる日、例の問題児三人組が下級生のマフラーをズタズタに引き裂くという事件が生徒指導の高岡教諭の耳に入り、彼らはとうとうお縄を頂戴する。

その際、都合良く芋づる式に彼らの非行の証拠が出てきた理由は、神のみぞ、いや、とある二人と神のみぞ知ることだろう。

生徒たちの間では、あずき色のマフラーを巻いた二人が騙したんだ、とわめいて三人が自宅謹慎になったという噂で持ちきりになったが、それはまた別の話だ。

了

あとがき

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。

もし、拙宅の「兄妹以上、きょうだい未満」を読んでもう一度読んでいただいた方がいらっしやいましたらば、何と言いますか、申し訳ありません。

同姓同名の同一キャラを使った話を展開させることに、ご不快になられる方もいらっしやるとは思いましたが、書いて皆さまに読んでいただきたいという思いを優先させてしまいました。

この場でお詫びさせていただきます。

一話目の前書きにも書いたとおり、名前や一部の設定に同じ所はありますが、これはこれ、それはそれ、ということで、まったく関係はありません。

したがって、このお話でのみどりと高馬が血が繋がっているということは絶対にありませんので、ご理解いただきたく思います。

さて、このお話は「呼ぶ声が聴こえる」というシリーズものの最初のお話として書いていたものです。

某巨大掲示板に投稿したものを加筆・修正しましたが、そんなに変わっていません。

というかほとんど変わってないですね。

なんか読んだことあるな〜と思ったら、そういう理由だと思えますので、あしからず。

現在連載している二作品を優先していきますので、この二人の今後の話はいつお届けできるか分かりませんが、とりあえず、中学編、高校編、社会人編とありますので、気が向いたときに覗いてみる、

ぐらいの緩いスタンスでお付き合いいただけましたら幸いです。ありがとうございます。

また、「兄妹以上」の秋良高馬同様、このキャラにはモデルとなつた原型があります。

気がついた方には大変申し訳ないですが、どうか見逃してやってください。

なお、小学生編はあと二作品くらい短編を挟むかもしれません。これもいつになるかは分かりませんが、もし気に入ってくださいました方がおりましたら、長い目でよろしくお願いいたします。

それでは、おそまつさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8153t/>

はじまりの日、雨

2011年10月9日00時26分発行